夢占

楠山正雄

一

むかし、摂津国(せっつのくに)の刀我野(とがの)という所(ところ)に、一匹(ぴき)の牡鹿(おじか)が住(す)んでいました。この牡鹿(おじか)には二匹仲(ひきなか)のいい牝鹿(めじか)があって、一匹(ぴき)の牝鹿(めじか)は摂津国(せっつのくに)の夢野(ゆめの)に住(す)んでいました。もう一匹(ぴき)の牝鹿(めじか)は、海(うみ)を一つへだてた淡路国(あわじのくに)の野島(のじま)に住(す)んでいました。牡鹿(おじか)はこの二匹(ひき)の牝鹿(めじか)の間(あいだ)を始終(しじゅう)行ったり来(き)たりしていました。

けれども牡鹿(おじか)は摂津(せっつ)の牝鹿(めじか)よりも、淡路(あわじ)の牝鹿(めじか)の方(ほう)を、よけい好(す)いていました。そしていつも淡路(あわじ)の方(ほう)へ行って遊(あそ)んでいることが多(おお)いので、夢野(ゆめの)の牝鹿(めじか)はさび

しがって、淡路の牝鹿をうらんでいました。

二

ある日めずらしく牡鹿は夢野の牝鹿の所へ来て、一日遊び暮らしていました。そしてそのあくる朝帰ろうとする時、ふと悲しそうな、心配そうな目をして、ため息を一つつきました。牝鹿はふしぎに思って、

「あなた、どうかなさいましたか。大そう顔色が悪いようですね。」

とたずねました。

牡鹿は、

「なあに何でもないよ。」

といって、強く首を振りました。

「いいえ、ため息をおつきになったりなんかして、きっと何か御心配なことがあるのでしょう。わけを話して下さいまし。」

と牝鹿がしつっこくせめました。そこで牡鹿もしかたなしに、

「じつはゆうべ、いやな夢を見てね。」

といいました。

「それはどんな夢。」

「何でもわたしが野の中を歩いていると、いつの間にか頭の上に草が生えて、背中には雪が積もった。どうしたのかと思って、気持ちが悪いから、雪を払おうとすると、夢が覚めた。いったい何の知らせだろうか。気になってしかたがない。」

といいました。

すると牝鹿は、ふと思いついて、これはちょうどいい折だから、こういう時に牡鹿をおどかして、もうこののち海を渡って淡路へ行くことを、思い止まらせてやろうと考えて、でたらめな夢占をたてました。それは、頭に草が生えたとみたのは、かりゅうどの矢が

首に当たる知らせで、背中に雪の積もったのは、殺されて塩漬けにされる知らせだというのです。

「だから今日は淡路へ渡るのは止して、ゆっくりここで遊んでおいでなさい。」

と牝鹿はいいました。

「海を渡ればきっと途中でかりゅうどに射られて、殺されるかも知れません。」

そう聞いて、牡鹿はこわくなりました。どうしようかと思って、とうとうその日は一日ぐずぐず暮らしていましたが、日が暮れかかると、どうしてもがまんができなくなりました。もうなんでも野島へ渡らずには

いられなくなりました。そこで夢野の牝鹿の止めるのもきかずに、とうとう出かけて行きました。

するとまったく占いのとおり、海を渡る途中かりゅうどに見つかって、牡鹿は首を射られて殺されました。そしてそのなきがらは、雪のような塩の中に詰められて、人に食べられてしまいました。

ですから、うっかりじょうだんに占いなどを立てると、それがほんとうになって、とんだ災難をうけることがあるものです。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
　　1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。